The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

タミル・バクティの「情熱」
——アールヴァールを例に——

宮本　城

1．はじめに

南インドのタミル地方では，7世紀頃からシヴァ派，ヴィシュヌ派のバクティ詩人（聖人）達が活動をおこない，寺院を巡り，神への思いを吟唱したと言われている．また，その活動の影響を受けてジャイナ教，仏教は衰退したと考えられている．そして，これらタミル地方のバクティ詩人達の信仰は，北インドのバクティ詩人に比べて，情熱的，熱烈であったと，一般的には言われている[1)]．

タミル地方のバクティ詩人達の中で，ヴィシュヌ派のバクティ詩人達は，アールヴァール（āḻvār）と呼ばれている．このāḻvārが残した約4000の詩は，後に編纂されて*Nālāyirativyaprapantam*『4000の聖典』（以下*NT*）と名付けられた．タミル地方のヴァイシュナヴァは，この*NT*には，ヴェーダのエッセンスが含まれていると考え，この作品を非常に重要視しており，「タミルのヴェーダ」という別名を与えている．さて，アールヴァールという名前の語源になったのは，動詞のāḻである．*Tamil Lexicon*によると，āḻには，“1. to sink, plunge, dive; 2. to be absorbed, immersed, overwhelmed”という意味がある．そして，āḻvārには，“1. One who is deep in meditation on the attributes of the Supreme Being”という意味が与えられている．このようなことから，アールヴァールの原義は，「神への思いに沈む人」という意味であると考えられる．「神への思いに沈む人」というと，穏やかな信仰の様子が思い浮かぶが，概説書等では，アールヴァールについては，穏やかな様子ではなく，その反対に「情熱的」，「熱烈」といった形容がなされることが多い．

なぜ，このように，原義とは正反対の形容がなされることになったのかについては，これまで明瞭な説明がされていない．したがって，本稿では，「情熱的」，「熱烈」といわれるアールヴァールの信仰について，彼らの残した作品を通して考察していきたい．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

2．*NT*

2．1　*Mutal-tiruvantāti*

最初に *NT* の中で，最古の作品である *Mutal-tiruvantāti* の1節を挙げる．この作品は，初期3聖人の1人，Poykaiyāḻvār の作品である．

無駄に多くの日々が過ぎ去ったと恐れ，私は泣いた．
海の水を足でかき回して眠る，美しい目をした，海の色をした男の足を，
蛇の寝台の上に見て，私は拝んだ．(16)

この *Mutal-tiruvantāti* を含めた初期3聖人の作品には，ヴィシュヌ神の古潭を，非常に素朴に穏やかに歌い上げるという特徴が見られる．

2．2　Āṇṭāḷ

次に，アールヴァールの中で，唯一の女性である Āṇṭāḷ の作品について見ていきたい．彼女は，*Tiruppāvai*，*Nācciyār-tirumoḻi* という2作品を残している．前者は，牛飼い女達が誓戒を行う時の様子が歌われており，後者は，ヴィシュヌ神やクリシュナへの思いを歌にしたものである．その中には，ヴィシュヌ神と結婚する夢を見たという，有名な歌が含まれている．

驚異をなす者，堅固な北のマトゥラーの王，
清浄な豊かな水のヤムナー川の岸にいる者，
母の腹を優れたものにしたダーモダラ（クリシュナ）を，
私達が清らかにやって来て，清浄な花を散らし拝んで，口で歌い，心で想うと，
過去の罪も，これから生じようとしている罪も，火の中の綿のようになる．
彼のことを称えるべし．(*Tiruppāvai* 6)
明日が結婚式であると，日を決めて，
ナラシンハ，マーダヴァ，ゴーヴィンダである若者（クリシュナ）が，
パームの花とカムク樹で美しく飾ったアーチの下に，
入ったという夢を私は見た．友よ．(*Nācciyār-tirumoḻi* 6-2)

Āṇṭāḷ については，後代に作られた *Kuruparamparāpāvam* 等の伝記に，以下のような記述がある．

父の Periyāḻvār が，花園のバジルの下にいるのを見つけて育てる．
ヴィシュヌ神に飾った花輪を帯びて，自分につける．
ヴィシュヌ神と結婚をした夢を見る．
シュリーランガムのヴィシュヌ神との結婚式の後，消える．

したがって，これらの伝記を基にして，Āṇṭāḷ がヴィシュヌ神やクリシュナを

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

想うあまりに，彼女が，牛飼い女になりきって，詩を作ったという説明がなされることがある．しかし，これらは，あくまで後代に作られた伝記であり，必ずしも事実を正確に記しているものではないということも，常に念頭に置かなくてはならないであろう．

殊に，サンガム文学の中の恋愛文学を扱うアハム文学では，話者，場面，登場人物が設定されており，作者が直接自分の思いをそのまま歌にするのではないことにも注意しなくてはならない[2]．アハム文学の伝統に則して考えれば，たとえ作者が，他の人物に成り代わったかのように詩を作ったとしても，それは，それほど不思議なことではないのである．したがって，Āṇṭāḷ が，サンガム文学の伝統を取り入れて，これら2作品を著したと考えることも可能であろう．実際に *Tiruppāvai* の最後の詩には以下のような描写がある．

(前略) 美しいシュリーヴィリプットゥールに生まれた，
新鮮な蓮の心地よい花輪をつけた Periyāḻvār の娘 (Āṇṭāḷ) が話した
サンガムのタミルの花輪である 30 詩節を間違えずに，
ここでこのように唱える人々は，4つの大きな山のような肩を持つ，
赤い目の美しい顔をした，優れたティルマールによって，
どこにおいても恵みを得て，喜びを得る．(後略) (30)

この詩節の中の「サンガムのタミル」という表現については，解釈が分かれているが[3]，いずれにせよ，Āṇṭāḷ の詩節を解釈する際には，彼女がサンガム文学の影響を受けていた可能性を考慮する必要があるだろう．

2.3　*Periya-tirumoḻi*

次に，Tirumankaiyāḻvār が著した *Periya-tirumoḻi* の中の有名な詩節を挙げる．この詩節では，生まれたことによって苦しみを受け，女性におぼれたものの，最後に神に出会えたことによって，心の内面的な喜びを得たことが穏やかに表されている．

私は苦しんだ．私は苦しみ苦しんだ，心によって．大きな苦しみの中に生まれて，
私は結びついた，若い女性達と．彼女らが与える関係だけを考えて．
私は走った．走って，優れた恵みによって，知恵という大きな場所を知って，
私は探した．探して，私は見つけた，ナーラーヤナ (ヴィシュヌ神) という名を．(1)

2.4　*Tiruviruttam*

次に，Nammāḻvār の作品である *Tiruviruttam* を見てみたい．Nammāḻvār は，アールヴァールの中で，最も深い宗教的・神秘的体験をしたと言われており，彼の著した *Tiruvāymoḻi* という大作は，*NT* の中で，最も重要な作品であると考えられて

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

いる．その一方で，彼は，*Tiruviruttam* では，以下のように，神に会えない苦しみを歌にしている．

男と別れた女が耐えられずに自分の心と争うこと
　美しい体の色が変化する．集まって輝く青斑が広がる．夜は非常に長い．
　このようなものすべては，［敵を］切る円盤をもつ，私の主であるクリシュナの，
　心地よく美しいバジルを望んで結びつく
　良き心が与えて行った比類なき富である．(12)
女の苦しみを，女友達が男に向かって話す
　どれほど頼んでも，一人の女を憐れまずに，黒い海は，波によって轟く．
　蛇の上に寝た雨雲のような色の男よ．
　今後は，あなたの恵み以外によって，彼女の心の落ち着きを守ることは難しい．
　［あなたの行為は］良いことであろうか．(62)

これらの詩節の中の「体に青斑が広がる」，「長い夜に苦しむ」，「海の音を聞いて悲しみが増す」といった表現は，サンガム文学のアハム文学において，恋人に会えない女性の苦しみを描く際に，頻繁に用いられるものである．したがって，N.Cutler もしばしば指摘しているように[4]，Nammāḻvār が，アハム文学の様式に精通していたことは明らかである．そして，この *Tiruviruttam* で，神に会えない苦しみを直接的に訴えるのではなく，あえてサンガム文学の技巧を取り入れたことは注目すべきであろう．

2．5　*Kaṇṇinuṇ-ciṟuttāmpu*

次に，Maturakaviyāḻvār の *Kaṇṇinuṇ-ciṟuttāmpu* の１節を挙げる．

さまよっても，私は，神々の中の神の黒い美しい聖なる姿を見る．
これが，非常に偉大な Nammāḻvār のしもべとなった私が得た果である．(3)
徳に満ちたバラモンたちは，私を卑しいものと考えることにより，
母として，父として，私を支配する Nammāḻvār が私の主である．(4)

この作品は非常に短い作品であるが，ヴァイシュナヴァでは重要な作品と考えられている．ここでは，Maturakaviyāḻvār は，自分の師匠である Nammāḻvār を称えており，直接神を称えているわけではない．しかしながら，短く少ない言葉で師匠を称えることによって，バクティ信者を信じて，そのしもべになることが，神に至る道であるということを端的に示した点で，ヴァイシュナヴァでは，この作品は重要視されている．このように，アールヴァールの作品の中には，単に神を称えるだけではない信仰の様子が見てとれるものもある．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

3．結論

以上，*NT* からいくつかの詩節を見てきたが，それらの詩は，穏やかに神への思いを歌ったものであって，必ずしも情熱的であるというわけではない．また，明らかにサンガム文学以来の伝統に則って作られたと思われるものもあることから，非常に技巧的な面も備えているといえる．したがって，彼らの詩は，感情の発露を直情的にそのまま詩にしたものであるとは言いがたい．

アールヴァールを語る際には，まず，後世に作られた伝記を基にして，説明がなされることが多い．しかし，伝記はあくまで後世に作られたものであり，必ずしも正確なものであるとは限らない．したがって，残された詩節を基にした解釈も必要であろう．もちろん，本稿では，ごくわずかの詩節を例に挙げたにすぎず，これらの例ではアールヴァールの信仰の性格を決定するに不十分である．しかし，アールヴァールの信仰については，従来通りの「情熱的」，「熱烈」といった表現をするだけではなく，アールヴァールという名が示すとおりに，神への思いに深く沈んだ内省的で穏やかな信仰の様子も認めるべきではないだろうか．

1）Nilakanta Sastri, *A History of South India*, p.422, "Its saints and seers evolved a new type of *bhakti*, a fervid emotinal surrender to God...".

2）参考のため，Kapilar の詩（*Kuṟuntokai* 25）を以下に挙げる．
結婚が延び延びになっているとき，女が友人に言ったこと．
　誰もいなかった，あの盗人以外には．
　もしもあの人の言葉が嘘であったなら，いったい私はどうしよう．
　粟の茎のような緑の細い足の，鷺が一羽
　小川の中でアーラル魚を捜してはいたけれど．
　あの人が私とちぎったあの日．（高橋孝信（訳），『エットゥトハイ　古代タミルの恋と戦いの詩』，pp.16-17 より引用．）

3）伝統的な注釈家である Periyavāccāṉ Piḷḷai は，*Mūvāyirappaṭi* で，この箇所を「集団として享受すべきプラバンダム」と解釈している．一方，Jean Fillizat は，"En trente guirlandes de tamoul académique" と訳し，これを「サンガムのタミル」と解釈している．

4）Norman Cutler, *Songs of Experience*.

〈キーワード〉　タミル，バクティ，ヴィシュヌ派，アールヴァール

（東京大学大学院博士課程満期退学）

NII-Electronic Library Service